リック教会の聖職者であったところから、ドイツ教会闘争（広義）の一環としてこの問題をとらえようとする河島幸夫氏の著書がある。医学者が書いたものでは『ホロコーストの科学』（原題『死の科学』）が邦訳されており、「安楽死」問題をあつかっているが、全貌を描いたものではない。

一方、ドイツでもこの問題のくわしい検討は決して早くなかった。小俣氏がたびたび引用し、現在でもこの問題の基本文献とされるエルンスト・クレーの著書『ナチ国家における安楽死』が発表されたのは一九八三年であり、それを手始めに、最近になって多くの研究が公刊されるようになった。私の机上にも、ノルベルト・フライが編集した『ナチス時代の医学と健康政策』があるが、この本の半分は安楽死問題を扱っている。

小俣氏は、精神医学者としてドイツ留学中にこの問題に接する機会があり、それを出発点として、詳しい文献検討とたびたびの現地調査を行って、この著書を完成された。その記載は、精密詳細である。たとえば、私は論文でポーランドで精神疾患患者が集団射殺によって殺害されたとのべたが、その内容を具体的に示すことができなかった。氏は、行われた場所、状況などをくわしく記載している。

これに限らずこの書の特徴は、具体的な史実を正確に記載していることと、ひろい思想史的視野をもって書かれていることにある。「安楽死」問題を論ずるには、その前史、思想的社会的背景、政策の決定過程、実施組織とその構成員、実施状況、その反響、戦後処理、倫理的評価などの記載が必要だが、著者は、このような点を系統的に記述し、学問的レベルの高い、しかも読みやすい、興味深い本を作りあげた。「安楽死」問題をそれのみに終わらせず、日本が体験した問題、他の国においておこり得る問題と結びつけて考察されていることも、ナチスの問題を考えるとき、なくてはならない観点である。

今後、日本の医学者、医史学者によって、この問題の研究がさらに進むことを望むが、その場合もこの書は恐らく基本文献として残るであろうし、一般のナチズム研究者にとっても貴重な貢献となるであろう。

このような書物が生まれたことを、心から喜びたい。

（泉　彪之助）

〔人文書院・京都市伏見区竹田真幡木町三九―五、電話〇七五―六〇三―一三四四、一九九五年八月一〇日発行、B六判、二六六頁、定価二四七二円〕

山下政三著『脚気の歴史―ビタミンの発見』

著者はすでに一九八三年に『脚気の歴史―ビタミン発見以前』、一九八八年に『明治期における脚気の歴史』なる大著を刊行し、膨大な文献を駆使して、ビタミン発見以前の主に日本における脚気の歴史を詳述し、多くの注目を集めた。著者は東大第一内科にながく在って臨床医学に従事された脚気の

専門家である。本書は一九六九年以来書き続けてこられた脚気の歴史・三部作のうちの完結編に当たるものである。

脚気という病気は（今ではほとんど見られなくなったが）明治期には日本の国民病とまでいわれ、とくに軍隊に多く、海軍では常時二―三割はこの病気にかかっていたほどであった。海軍軍医・高木兼寛は軍人を対象とした研究から、その原因が食物の欠陥にあることを示し（栄養欠陥説）、兵食を改善して海軍から完全に脚気を撲滅したのであった。当時は時を同じくして脚気伝染病説が起こったため、栄養欠陥説の素直な発展は容易ではなかったが、外国では栄養の欠陥の在りかを実験栄養学的に追求し、遂に新しい栄養素・ビタミンの発見にまで辿り着くのである。

本書はこの栄養の欠陥を追求して新しい栄養素・ビタミンを発見するまでの過程を文献、資料を詳細に検討して追跡したものである。全八章に分かれているが、列挙すると、（一）世界各地の脚気病、（二）近代医学がまとめた脚気の病像、（三）十九世紀までの脚気原因説、（四）脚気原因研究の進展、（五）ビタミンの発見、（六）脚気ビタミン欠乏説の確立、（七）ビタミンB_1剤の登場と脚気の消滅、（八）ビタミンとは何か、誰がビタミンを発見したか、の八項目である。

著者のもっとも力を入れたところは第一章と第四章のように見うけられる（第六章は第四章の続きと考えると）。第一章では、こんなところにまで脚気があったのかと驚くほど広範な地域の脚気の発生状況がよく調べられている。目次に現れる地名だけでもインドネシア、インド、ミャンマー、マライ連邦など二七国にも及んでいる。こんなに収集されたことは今までになかったのではなかろうか。第四章は、脚気という臨床医学での問題がエイクマンを中心に栄養学的研究から解けていく劇的な場面であるだけに著者の筆も力強く進められている。日本では残念ながら患者についての研究を重視したあまり、動物を使った栄養実験に移行できず、ビタミン発見の流れに乗ることができなかったという。欲をいえば第五章「ビタミンの発見」では、も少しビタミンの本体について書いて欲しかった。脚気ビタミンの発見といえば、そこにはビタミンB_1の本体（つまり化学構造）の研究史も含まれると考えるからである。

筆者が驚いたのは、本書のいたるところで著者がオランダ語の原文を引用し、丁寧な解説を試みていることである（そういえば何年か前にお会いしたとき、本書の執筆のために今オランダ語を勉強していると言われ、その底知れぬエネルギーに驚嘆すると同時に、ほぼ同年配のおのれの不甲斐なさを痛感したことがあった）。著者によるとオランダ語の原論文を読んでみてやっと分かった事実も多かったという。

文献が全一、〇〇〇部にもなるこのような大著になると、得てして読者を退屈させるものであるが、著者は随所に脚気学説やビタミン発見のオリジナリティーについての著者独自の見解を挿入して、そうさせないようにしているところは見事である。本書は単なる脚気という一疾患の研究史というだ

けでなく、もっと広く病気の本体を追求する方法論を示唆する名著として永く読み続けられることを期待したい。

ただ将来もし改定する機会があれば、その時にはぜひ事項、人名についての索引を加えて欲しい。このような五〇〇頁を越す大著を熟読するにはやはり索引が欲しくなるのである。

（松田　誠）

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、一九九五年、A五版・五一八頁、定価一四、四二〇円〕

山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』（上・下）

一九八九年から五年間、文部省の国際日本文化研究センター（京都）で「東アジアの本草と博物学の世界」のテーマにより山田慶兒教授主宰の共同研究が行われた。志を同じくする同センターの専任教官と来訪研究員および全国の研究者が参加し、交互に発表と討議を交わす二日間の共同研究会が計二七回、調査旅行が三回なされた。

同研究会の中間報告集、山田編『物のイメージ・本草と博物学への招待』は昨年四月に朝日新聞社より刊行されたが、本書二冊はその最終報告集にあたる。評者も当共同研究に参加したが、諸事情で本最終報告集には寄稿できなかった。その責も兼ねて、本書を簡単に紹介しようと思う。

全体で計二一論文が収められるが、なにしろ対象が本草や博物だけに話題も広い。まず目次で示すと、それらは以下のように七分野に大別されている。

上冊：I分類／II記述／III描写

下冊：IV施策／V渡海／VI考証／VII企画

下冊巻末には索引（人名・書名）もある。

さてI「分類」では山田慶兒「本草における分類の思想」、木村陽二郎「植物の属と種について」、西村三郎「東アジア本草学における植虫類」の各論文が載る。

山田氏は中国における事象の分類方法と思想を本草書ほか歴代文献より抽出して日本のそれと比較し、日本では技術的思考や実用主義・生態学的視点が顕著だったことを明らかにした。

木村氏はヨーロッパで確立された植物学名と属・種の概念、また日本の本草書で従来用いられていた属・種の相違に着目し、かつて日本の本草学者が漢名に和名をあて、近世以降ヨーロッパ植物学の受容により植物学者が和名に学名をあてはめてきた歴史を分析した。

西村氏は、かつて西欧博物学でサンゴなどが動物とも植物とも鉱物とも分類できずゾフィータ（植虫類）と呼ばれたが、東アジアの本草や博物学では問題視されず、人間に有用な部分のみに注目してバラバラに分類されてきたことから、東アジアでは物自体の本性を見究める思考が弱かったことを指摘する。